

〔特別寄稿解題〕

文化大革命時期における中国出版事業の一光景

— 毛沢東に献上された幻の「大字本」の正体について

陳 仲 奇

1972年の頃、中国は文革の嵐の真只中にあった。『毛沢東語録』¹⁾、『魯迅全集』、『馬恩列斯（マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン）選集』しかない全国の新華書店の店頭で、新しく校点（校訂）整理された司馬遷の『史記』の新刊²⁾が赫然と並べられていた。事実上、1966年から始まった文化大革命以来、古今東西にわたるほぼすべての優れた文化典籍が、「封建的、資産階級的、修正主義的」のレッテルを貼られ、読むことさえ禁止されていた。このような「破旧立新」の時代風潮の中で、『史記』のような古籍が再版されたこと自体、当時の人々に奇異の感を与えたに違いない。筆者も一種の驚嘆を覚えたことを今も忘れない。当時11.30元という価格は決して安いとは言えなかった（一般労働者の月給が38元の時代だった）が、高校を卒業したばかりの筆者は十数回も新華書店に足を運び、『史記』の前で躊躇逡巡したあげく、とうとう誘惑に負けて一揃い買ってしまい、今でも手許に置いてある。

それ以来、『二十五史』校点（校訂）整理の提案者は誰であったのか、なぜあのような時代背景の中で『史記』のような本が出版できたのかという疑問が、ずっと筆者の心の奥底にくすぶっていた。1982年、大学を卒業した筆者は、たまたま中華書局（古典を中心とする学術書出版社）に配属され、早速この長年の疑問を先輩たちにつけてみると、答えはきわめて明快であった。「『史記』の出版は毛沢東の特命だ。最初は1959年の国慶献禮書として十数部しか印刷しなかった。それは大きな活字で印刷した特別豪華版で、毛沢東が読むためであった」と。なるほど、毛沢東本人の特命でなければ、あの時代で『史記』のような古籍の整理出版は到底考えられなかったと筆者は一応納得したが、しかし、心の中の疑問は依然として解けなかった。なぜならば、それは伝聞でしかなく、決定的な証拠、すなわち、毛沢東に献上されたその「大字本」の豪華版は誰も見せてくれなかったからである。

この疑問は今年になってようやく解けた。

今年の9月、筆者は文部科学省科学研究費の特別領域研究・東アジア出版文化の補助金助成を受け、「中華書局と中華人民共和国の古籍整理事業——『二十五史』校点出版の背景」について実施した調査の過程で、中国社会科学院研究員である王煦華のもとで、ようやく幻の「大字本」の正体を突き止めることができた。それは、『史記』そのものの「大字本」ではなく、王煦華が自ら携わった『史通通釈』の「大字本」ではあるが、毛沢東に献上するために作られた特別な豪華版という点では共通している。

王煦華は『二十五史』校点整理の中心的存在である顧頡剛の弟子である。彼は1950年

に大学を卒業した時、顧頡剛に認められ、上海の私立合衆図書館に紹介され就職して以来、長年顧頡剛の指導を受けていた。1978年、招かれて、中国社会科学院歴史研究所に転勤し、顧頡剛の研究助手となり、現在は顧頡剛の遺稿の整理を任されている。王煦華によれば、1974年「批林批孔」の際、孔子批判の文献的テキストを作るために、歴代法家著作の注釈や校点出版が北京と上海の両方で進められていた。法家著作注釈に関する上海図書館の打ち合わせ会議の席上で、王煦華は「唐の劉知幾も歴史学者としての法家であり、その著作『史通』も法家著作リストに加えるべきだ」と提案した。その提案は、中国共産党上海市委員会写作組（文書作成班）に採用され、『史通』の校点整理も王煦華に一任することになったという。

王煦華は浦起龍の『史通通釈』を底本として選定し、早速、校点に取り組んだが、しかし、『史通通釈』の整理は、当時北京の「梁效」（＝両校、北京大学と清華大学両大学にあった大批判組のペンネーム³⁾）が同時進行していたため、その代替案として、北京側の標点本を「大字本」に印刷して「中央指導者」に献上し、王煦華一人で校点したもの（上海側）を一般公開用に印刷することで妥協が成立したのである。北京側が標点した『史通通釈』は、集団作業によるものであり、標点の形式も統一されていなかったため、上海人民出版社の責任者である張志哲が王煦華に最終校閲者になるよう依頼したのである。王煦華は、1975年7月5日から9月18日まで、2ヶ月余の時間をかけて、全稿の校正と数百箇所標点の統一し、そして一ヶ月後、上海郊外のある印刷工場に献上用の「大字本」が見事に完成したのである。



写真1 前列は『史通通釈』の「大字本」、後列は公刊本。

王煦華は出来あがったばかりの『史通通釈』の「大字本」を見ると、張志哲に自分にも一揃いほしいと頼んだが、張は「上からの指示で、大字本は国の指導者だけに差し上げることになり、整理関係者さえももらえないことになっている」と答えたものの、王が古くからの親友であるため、わざわざ印刷工場に頼んで、一揃いを余分に装丁してもらい彼に進呈したという⁴⁾。

王煦華の話から、少なくとも以下の点が確認された。

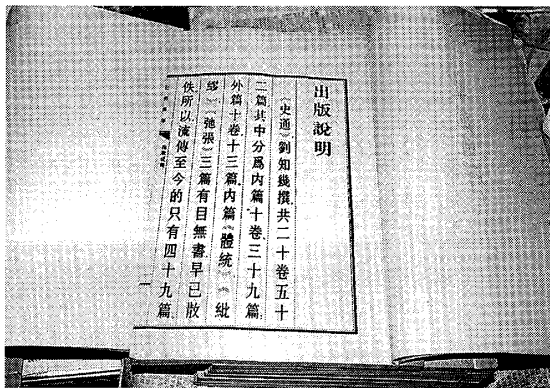


写真2 「大字本」の「出版説明」。

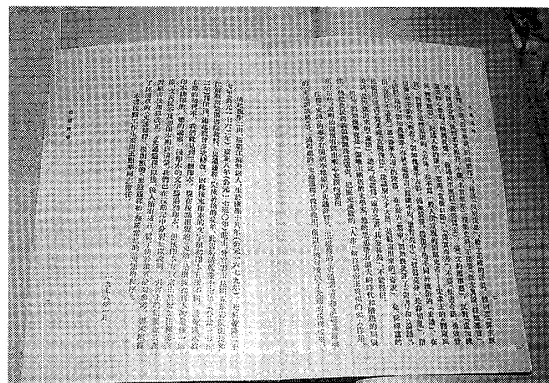


写真3 公刊本の「出版説明」。

- (1) 『史通通釈』の「大字本」は毛沢東を含む「中央指導者」に献上するためのものであり、整理関係者さえももらえないことになっていた。王煦華の手許にある『史通通釈』の「大字本」が民間に残された唯一の版本である可能性が高い。幻の『史記』の「大字本」の正体がなかなか現れてこないのも、恐らくそこに原因があると思われる。
- (2) 『史通通釈』の「大字本」は公刊本ではないため、表紙には書名も印刷されておらず、カバーもついていない。活字で印刷されたにもかかわらず、わざわざ木版印刷の線綴書の形を取っている（写真1、2、3を参照）。それはもちろん毛沢東の個人的な読書趣味に関係していると思われるが、しかし、これによって、現代中国の印刷事業において奇異と言えるほどの一光景を作り出したことは実に興味深いことである。
- (3) 『史通通釈』の校点整理が北京と上海の両方で同時進行された事実、北京グループと上海グループの古籍整理事業における主導権争いが伺われる。その背景には、1971年9月13日の「林彪事件」以後、周恩来を代表とする「文革行き過ぎ論」と、江青や姚文元を代表とする「文革右傾翻案論」の確執があると思われる（『二十五史』校点整理事業をめぐる周恩来と姚文元の確執については別稿に委ねる）。
- (4) 1959年に献上された『史記』の「大字本」と1975年に献上された『史通通釈』の「大字本」には共通点が見られるため、毛沢東の読書の趣味が明らかになってきた。毛沢東の文芸思想は、五十年代にすでに「推陳出新」、「厚今薄古」などが提唱されており、六十年代になると「破旧立新」、「破四旧（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を打破する）」などに激しさが一層増してきた。一方、自らの読書はマルクス主義の理論著作よりも歴史や筆記などの中国古典に偏っており⁵⁾、書物の様式までも古いものに拘りつづけていた。こうした矛盾は大いに吟味に値するものであろう。
- (5) 言うまでもないが、『史通通釈』の整理出版は文革時代の政治運動による産物の一つに過ぎない。しかし、実際の校点整理に際しては、王煦華のような旧知識人が担い手になっている。彼らは文革時代の厳しい社会・政治環境の中に置かれながら、可能な範囲で、自らの学術追求の信念を全うしようとした。王煦華は1975年から1978年までの3年間、『塩鉄論』注釈⁶⁾などの新しい「政治任務」に振り回されることなく、頑として『史通通釈』の校点整理に全力を注いだ。これに類似する状況は顧頡剛をはじめとする知識人の『二十五史』校点整理の大事業にも見られる。このような知識人の努力があったからこそ、中国の出版事業における学術の伝承は中断されることなく、今日の古籍整理事業に継承され、役に立っていたのである。その歴史的文化的意味は実に大きいと言える。

毛沢東はかつて自らの歴史功績を次のように語ったことがある。一つは中国人民を導き、蒋介石政権を倒し、中国大陸を解放したこと。もう一つは人類文明史上に未曾有の試みとしての文化大革命を引き起こしたこと。前者が政権樹立を目標とした暴力革命であるのに対し、後者はイデオロギーを純化することを目標とした文化による「継続的」革命である。

暴力革命は1949年に見事に成功をおさめたが、文化大革命は1976年の「四人組」の失脚によって終了した。その結果として、文化学術の領域はほぼ全滅の危機に瀕しただけではなく、社会のシステム全体も壊滅的な危機に直面した。この二つの大革命の成功と失敗が余りにも懸け離れていたため、毛沢東の歴史上の功罪に対する評価がかなりの影響を受けていることも事実であろう。

文化大革命の発生およびその評価については、歴史的、文化的な視点から総合的に見るほかに、さらに、国内外にわたる社会・政治環境にも多くの要因が存在しているため、全面的に総合評価することは、恐らく社会科学、人文科学など諸学科の学識者による共同作業が必要かと思われる。

しかし、文革の功罪を語るときには、毛沢東本人の思想作風も深く関係していると言えよう。本稿で取り上げられた文革期における出版事業の稀有な一光景、すなわち、毛沢東に献上された「大字本」の存在からも、毛沢東の思想作風に前後の変化が見受けられる。

毛沢東はその晩年においては、革命運動期に形成された調査研究を重視し実践を第一とした思想作風とは反対に、社会現実から目を離し、観念の世界に閉じこもり、古典書籍から理論的な栄養素を求める傾向が見られる。特に、1973年8月以降の「評法批儒（法家を評価し儒家を批判する）」運動、1974年1月以降の「批林批孔（林彪と孔子を批判する）」運動、1975年8月以降の「評水滸（『水滸伝』の宋江を代表とする投降主義路線への批判）」運動など一連の社会政治運動がその最も典型的な事例だと思われる。今回筆者が明らかにした幻の「大字本」誕生の経緯が、こうした事例研究の一助となれば、まことに幸いである。

注

- 1) 文革期に印刷された『毛沢東語録』は7億7,000万冊余、10億冊近い、50数億冊などの諸説あるが、中国国家新聞出版署の統計によれば、1966年～1971年の6年間、正規の出版部門は、『毛沢東語録』を10億5,817万7,000冊出版したという。詳しくは唐亜明「『毛沢東語録』研究(上)」(中国研究所編『中国研究月報』1999年8月号)を参照。
- 2) 中華書局1959年9月第1版、1972年5月北京第5次印刷された10冊のものである。
- 3) 王煦華特別寄稿、邱燕凌訳注「『史通通釈』校点の経緯について」(以下、「王煦華特別寄稿」と略す)の注11を参照。
- 4) 王煦華特別寄稿を参照。
- 5) 李鋭『廬山会議実録』、春秋出版社、湖南教育出版社1989年版、227頁。
- 6) 王煦華特別寄稿と注4を参照。

キーワード：出版文化 毛沢東 二十五史 大字本

(CHEN Zhongqi)